

学習院大学山岳部、阿弥陀岳遭難事故の概要

今冬の2月9日、八ヶ岳に入山していた学習院大学山岳部の5人は阿弥陀岳で遭難し、チーフリーダーの吉田くん（男・4年）、土山さん（女・1年）の2人が死亡する悲しい結果となった。関係者による検証作業が続けられているが、現在までに判明した事実関係について取材することができたのでお伝えする。

学習院輔仁会山岳部＝協力
野村 仁＝取材・文
(文中敬称略)

学習院大学山岳部では、今回の事故後、原因究明のため検証作業を続けてきた。当事者からの聞き取り内容がまとまり、遭難事故のアウトラインが明らかになってきた。

資料として参照できた計画書がある。最近、これだけの完全な登山計画書はなかなか見られない。計画書作成の手本にしたいようなすばらしいものである。

日程は2月7日から11日までの4泊5日。行者小屋にベースキャンプ（以下 BC）を設けて、赤岳西壁主稜、横岳西壁石尊稜、阿弥陀岳北稜を各1日で登る計画だった。装備リストを見ると、フィックス用を想定しているのか、メインロープ、スリング類の量が多い。パーティでツエルト2張、個人でビーコン、ゾンデ（プローブ）、スコップ、携帯電話、サバイバルシートを携行している。安全対策面も万全といえる。

3月には春合宿として中崎尾根から槍ヶ岳を予定しており、本山行はそのためのステップアップとして行なう個人山行と位置づけられていた。

直前の2月5～6日、吉田とサブリーダーの A（男・2年）は日本山岳会学生部のアイスクライミング集会に参加し、7日はジョウゴ沢付近で登攀システムの確認などを行なった。一方、後発隊の B（男・2年）・C（男・1年）・土山は、柳川南沢道から行者小屋に入山し、16時過ぎに5人が BC で合流した。その夜、天気予報を検討した吉田は、「明日は天気が崩れていくから、最も早く終わられる阿弥陀岳北稜に登り、午前中にはテントに戻ろう」と提案した。

ホワイトアウトの中、誤って立場川へ下る

8日3時30分起床。昨夜の提案どおり、阿弥陀岳北稜を登ることに決定。5時、テントを出発した。晴れていて視界良好、周囲の山々が確認できた。日の出時刻の約1.5時間前、非常に早い出発だが、北稜の岩場でヘッドランプがいらなくなるように計算されていたのだろう。6時、ハーネス、アイゼンを装着。雪が降り出したが風は弱く、阿弥陀岳がよく見えた。

7時、北稜の岩場に到着し、2組に分かれて登攀開始。降雪が強まったが、まだ周囲の状況が確認できた。岩場をスタカットで登り、雪稜をコンティニューアスで登った。スタカットは難しい岩場で行なう本格的な確保方法、コンティニューアス（略称「コンテ」）は容易な箇所で行なわれる、より簡易的な確保方法である。北稜には2カ所の岩稜があり、第1の岩稜はやさしいので確保不

遭難に至る経過

月日	時刻	事項
2月5～6日		吉田・Aは日本山岳会学生部のアイスクライミング集會に参加
2月7日		吉田・Aはジョウゴ沢付近にて登攀システムの確認などを行なう。16:00過ぎ、行者小屋BCで後発隊(B・C・土山)と合流
2月8日	3:30	起床
	5:00	テント出発。天気は晴れ、視界良好、風もほとんどなし
	7:00	阿弥陀北稜の登攀開始。天候悪化し風雪強まる
	8:00	阿弥陀岳山頂着、すぐに下降開始。風雪強くホワイトアウト状態(視界5～10m)。雪崩を意識してどンドン下り、沢沿いに出る
	時刻不明	現在地を把握し、立場川に下りて舟山十字路方向へ進んでいることを確認
	時刻不明	南稜に続く尾根を確認し、その尾根をめざすことにする
	16:30	尾根に取り付き、南稜へ登り返す。途中、標高2100m付近でビバークを決断
	18:00	半雪洞を掘り、ツェルト2枚を使用しビバーク
2月9日	6:00	出発準備
	7:00	南稜に向かって登り返す。天気は晴れ
	9:30	南稜正規ルートに合流。赤旗とトレースを確認
	11:00	青ナギで休憩
	13:00	無名峰とP1の中間地点でハーネス、アイゼン装着。吉田・土山はコンティニューアス、ほか3人はロープを使用せずフリー
	15:30ごろ	P3に到着。約30分遅れて吉田・土山も到着。吉田・土山、ほか3人の順番でP3のルンゼに入る。途中で吉田の指示により3人が追い越してそのまま先行(ここからパーティが分かれる)
	16:30ごろ	先行の3人は阿弥陀岳山頂着。相談の上、北稜を下ることにする
	18:00	3人は行者小屋BC着
	19:45	吉田・土山が下りてこないため心配になり、登山本部に連絡
	21:40	監督と連絡がとれ、状況を説明
23:00	(監督が)長野県警へ救助要請し、家族へ事情を説明。OB・部員6人が深夜、現地へ向かう	
2月10日	6:00	起床。警察と連絡をとり詳細を伝える
	9:00	警察・OB・部員と合流。美濃戸まで歩いて下山
2月11日	14:30ごろ	長野県警山岳遭難救助隊により広河原沢本谷第二ルンゼで吉田・土山の遺体発見

要のことが多い。第2の岩稜は北稜の核心部で、両方をスタカットで登り、続くやさしい雪稜はコンテで登った。アプローチも含めて第2岩稜取付まで約2時間、岩稜を約1時間で通過し、7時に阿弥陀岳に到着した。午前中に下山するには十分な時刻である。しかし、天候はさらに悪化し、風雪が強く、視界5～10mでホワイトアウトの状況になっていた。

頂上で標識を見て、下山する赤岳方面がどちらかは確認できた。すぐに下降を開始した。オーダーは先頭がB・C・Aの3人、後続が吉田・土山でコンテだった。文三郎道を下る予定だったが、視界が悪く風が強かったので、吉田は中岳沢を下るように指示した。資料には、雪崩を意識してどンドン下ったと書かれている。中岳沢は雪崩の危険な場所として知られており、できるだけ早く通過する必要がある。風雪でホワイトアウトのなか、急斜面を下っている間は、かなり危険な状況であることを感じていただろう。

ひとしきり下ってきつい斜面が平らになり、沢沿いとなった。この時点で5人は立場川本谷左俣の最上流部に入っていた。しかし、ホワイトアウトのため、現在地がどこかという意識はもてなかった。中岳のコルを通過した記憶がないまま、中岳沢にいたかと思っていたのではないかと。そうだとすれば、まだ雪崩の危険を逃れるために、急いで下り続けることが最優先事項であっただろう。



阿弥陀岳東面の迷った地点。山頂から中岳のコルへの稜線は意外に不明瞭で、視界が悪いときには立場川側へ引き込まれやすい。誤ったルートのラインは筆者による推定で、より厳密な検証作業が継続中である（写真＝西田省三）

遭難の意識はなく、そのまま南稜へ継続

しばらくの間、彼らは沢沿いを下っていった。青ナギの下付近で地図を確認したが、A以下3人は途中からルートの間違えたらしいことに気づいていたと言う。吉田はもっと早くから気づいていたかもしれない。現在地が中岳沢でないなら、反対側の立場川側へ下ったと考えるしかない。

道迷いの場合、現在地が不明であれば、一般的には引き返すことが最良の対処法である。しかし、本事例では現在地が把握できていたので、彼らは雪崩の危険地帯に向かって引き返すことはせず、南稜に登り返すことを決めたのだろう。かなり下流まで下降して南稜に続く支尾根を視認し、そこをめざした。それは立場川の標高1950m地点から立場岳に至る尾根だった。

16時30分、尾根に取り付き、登り返しを始めた。途中2100m付近（推定）の樹林帯でビバークを決めた。18時、斜面に半雪洞を掘り、ツェルト2枚を張った。雪洞の底に木の枝、個人マット、ザックなどを敷き、各自、非常用装備のサバイバルシートを羽織った。

20時、雪が降っていたが、樹林帯中で風はほぼなかった。レーション（行動食）を食べ、お湯も飲み、落ち着いていた。寝るときは山側に下級生から並び、土山はシュラフカバーに入って横になり睡眠はとれているようだった。男性4人は体育座り（両膝を立て両腕で抱えて座る）で、寝たり起きたりしていた。吉田は除雪のため、一晩中ツェルトの雪を払っていた。

南稜 P3 でパーティが分かれる

翌朝7時、南稜に向けて登り返す。天気は晴れ。樹林帯のためか風はほとんど感じなかった。

9時30分、南稜の立場岳付近に合流。この間はラッセルで、標高差270mの登りに2時間30分かかった。南稜には赤旗・トレースが確認できて、青ナギ、無名峰、阿弥陀岳頂上も見えていた。前の年に主要メンバーは南稜をトレースしており、このときに、危険な状況はほぼ脱出できたと思っただのではないだろうか。

11時、青ナギで休憩。13時、無名峰とP1の中間地点でハーネスとアイゼンを装着。吉田・土山はアンザイレン（ロープを結び合う）してコンテを開始、ほか3人はアンザイレンしなかった。このころ風が強まり、曇り始めて太陽が見えなくなると、急に寒くなったという。雪山では午後になるとこのような天気変化になることが多い。

15時30分ごろ、A・B・CがP3到着、約30分遅れて吉田・土山が到着した。P3は左側に巻いてルンゼ（第三ルンゼ右俣上部）をつめ上げるルートを取り、ここが南稜の核心部である。吉田はルンゼの状態を確認し「このまま行こう」と指示。吉田・土山がコンテでルンゼへ、続いてA・C・Bのオーダーで、ノーザイルでルンゼに取り付いた。ここは資料のまま引用する。

「ルンゼに入ると、先行する土山の登山靴が脱げかけ、履き直そうとしていた。吉田は急なルンゼで全員が止まったままの状況に危険を感じ、A・C・Bに先にルンゼを抜けるように指示を出す。Aが追い抜く際に、吉田から『このまま登っていては危険すぎるから、お前たちは先に行き頂上に出たあと、中岳沢を使って行者小屋に先に降りろ』と指示がある。

3人がルンゼを抜ける手前で、Bが後ろを振り返ったときには、吉田パーティはルンゼの3分の1を登った状況だった。土山の位置が上がっているため靴は履けたようだった。」

その後、Aを中心に1年のCをサポートしながら3人は登るのに必死で、吉田・土山を見ていない。

16時30分ごろ、阿弥陀岳頂上着。視界は比較的良好、北稜の最後の雪稜が確認できた。下降ルートを相談し、迷う心配がない北稜を下ることに決めた。岩場は右から迂回し、25mほど懸垂下降した。樹林帯に入ってヘッドランプをつけ、コンパスを行者小屋に合わせて進み、すぐ小屋が見つかった。

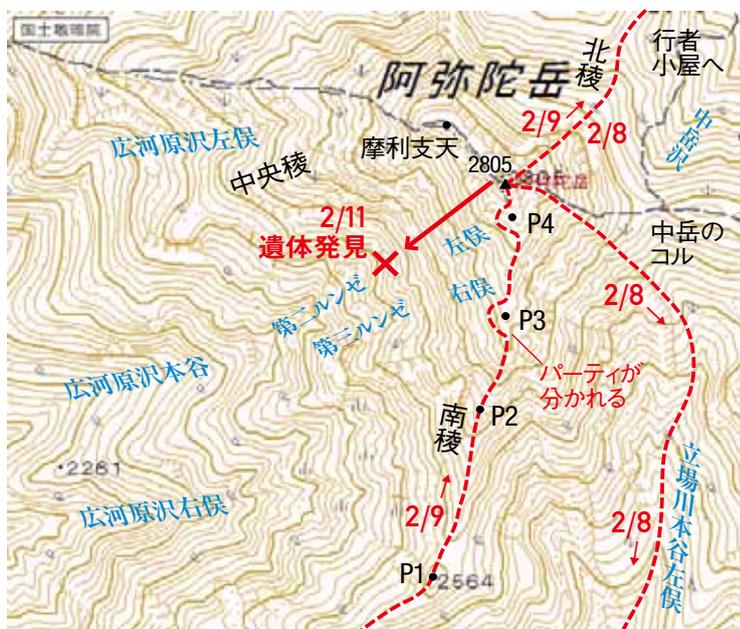
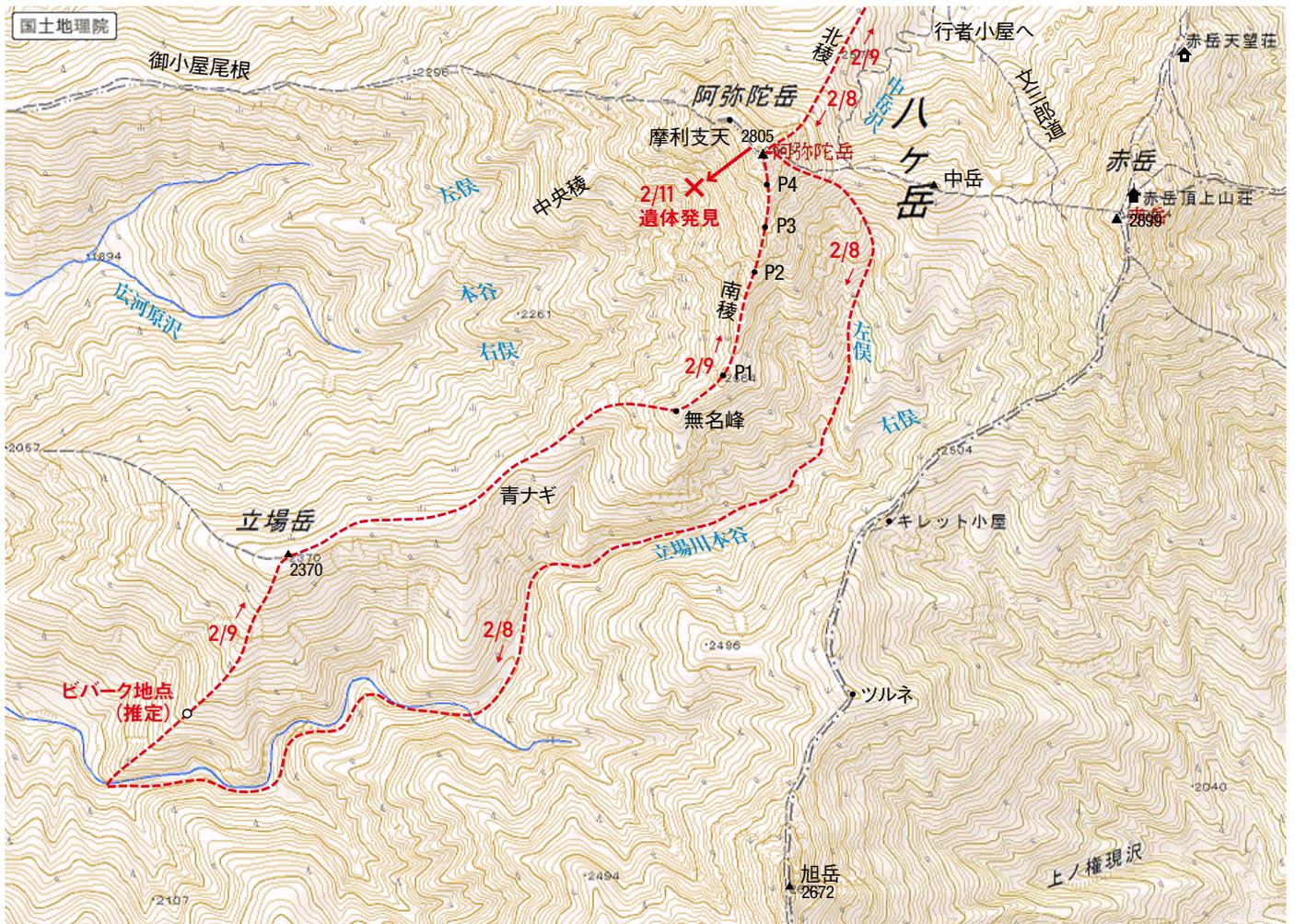
18時、BC到着。近くにテントを張っていた農大山岳部に時刻を聞く。暖をとり、凍傷箇所をぬるま湯で温めた。凍傷は軽傷だった。

遭難発生、そして戻らなかった2人

ところが、それから1時間半ほど過ぎても吉田・土山は下りてこなかった。心配になり、19時45分、登山本部へ連絡した。2時間後の21時40分、監督と連絡がついたので事情を説明。ビバーク2晩目になることから監督は緊急事態と判断し、23時、長野県警へ救助要請を行ない、家族に事情を説明した。また、深夜にOB・部員6人が八ヶ岳に向かった。

この時点で遭難発生となった。翌10日は早朝から、長野県警茅野署員とOB・部員ら計17人が阿弥陀岳山頂から南稜付近を捜索したが、この日は発見できなかった。一方、行者小屋にいた3人は、凍傷が軽度だったため、部員2人に付き添われて美濃戸まで歩いて下山し、救急車で病院へ向かった。

11日も上空と地上から、約20人態勢で捜索が行なわれた。県警ヘリが第二ルンゼの急斜面で赤い手袋を見つけ、県警山岳遭難救助隊員らが付近を捜索した結果、そこから約200m下の滝で



学習院大学パーティのたどった経路と遺体発見場所

一部のメンバーは前年に阿弥陀南稜をトレースしており、立場川側から安全に南稜へ登り返すことができるルートを選んだものと推測される。また、遺体発見場所が第二ルンゼであったことから、阿弥陀岳山頂を越えた地点から滑落したと推測される

ビーコンに反応があり、2人は発見された。時刻は14時30分ごろ、場所は広河原沢本谷第二ルンゼの標高2560m地点。2人はアンザイレンした状態で雪に埋まっていた。死因は、吉田は多発外傷、土山は特定できず、低体温症と推定された。

遭難の事実と報道などの相違点

今回の遭難事例については概要が判明しただけであり、これからも検証作業が続く予定である。推定による論評などは避けるべきだが、筆者の文責としたうえで、いくつかの点を指摘しておきたい。

第1に、コースミスをして立場川本谷へ下ったものの、彼らはそれを道迷い遭難とはとらえていなかった。引き返すことは雪崩の危険地帯へ長時間とどまることになる。それよりも安全性の高いルートから南稜へ登り返し、阿弥陀岳北稜から南稜へ継続するルートを再設定した。彼らの実力でこなしかれる確信あつての行動だっただろう。したがって、南稜から阿弥陀岳を越えてBCへ下るまでの過程は、遭難ということはできない。

第2に、吉田・土山はアンザイレンしたまま、日没前に阿弥陀岳に登頂した。土山のヘッドランプがザックの中にあつたこと、滑落した場所が第二ルンゼであつたことから、このことが推定できる（南稜から滑落すると第二ルンゼにはならない）。そして、阿弥陀岳登頂後に何か突発的な原因から滑落事故が起つたと推定される。つまり、本事例は道迷い遭難ではなく滑落事故であつた。

第3に、パーティの中で弱いメンバーが土山であり、リーダーの吉田が土山をカバーする行動をとつていたのは事実だが、それはパーティにとって当然の前提であつた。一部の報道に見られたように、土山が「遅れてパーティの足を引っ張つていた」という見方は正しくない。土山は入部以来、トレーニング山行に積極的に参加し、技術向上に熱心に取り組む部員だつた。それまでに習得できていた登攀技術、雪山技術を前提とし、さらに向上させるために今回の八ヶ岳山行は計画された。女性である土山は、ほかの上級生や男性部員と比較して体力的に弱い面はあるが、しっかりとパーティについて歩き、南稜から阿弥陀岳に登頂している。

今回の遭難報道では、道迷い遭難と断定されていた点と、正規コースへ戻ろうとした際に疲労した土山が遅れ、それをカバーしようとした吉田も犠牲になつた、という内容のものが多く見られた。事実はそうではなく、吉田・土山ともに阿弥陀岳まではしっかりと自力で行動できており、このときまで異変はなかつた。そして、その後何らかの原因により、滑落事故が起つたと推定される。あと1時間少々の下りを残すだけだつたことを思えば、何としても悔やまれる点である。

現在、学習院大学山岳部は無期限活動停止で、遭難事故の検証作業に取り組んでいる。一定の段階で中間報告を行ない、夏ごろまでに最終報告をまとめたいということだつた。

*

最後に、亡くなつた2人のご冥福を、心よりお祈りいたします。

(2015年3月31日)

© 山と溪谷社
『山と溪谷』2015年5月号に抜粋版を掲載